

肉食御曹司の独占愛で 極甘懷妊しそうです

沖田弥子

Yako Okita

目次

肉食御曹司の独占愛で極甘懷妊しそうです

5

書き下ろし番外編

肉食夫の独占愛に縛られて

319

肉食御曹司の独占愛で

極甘懷妊しそうです

プロローグ 一つだけの願い事

外資系ホテルの高階層にあるバーからは、煌めく夜景が見渡せる。

甘いカクテルでほろ酔いになった私——吉岡さやかは、ほうと息をついた。

臙脂色のソファの隣には、上司の久我凌河さんがロックグラスを傾けていた。

仕事ができで、しかもイケメンの久我部長は、社長の息子——つまり御曹司でもある。仕事に厳しいところはあるけれど、いつも丁寧なフォローしてくれる。

でも、仮に久我部長に言い寄られたとしても、恋はしない。

私はとある理由で、恋愛と結婚への願望が抜け落ちていくから。

だけど、残りの願い——出産と子育てだけはどうしても叶えなかった。

夜景に目を細めていた私に、久我部長が囁く。

「吉岡さんはとても仕事を頑張っているよね。そういう一生懸命な姿に惹かれたんだ」

「……仕事ですから、懸命にこなすのは当然です」

少し酔った私は、ふわふわしながら返事をする。

久我部長は妖艶な雰囲気をもとい、私を見つめた。

「ご褒美に、一つだけ願い事を叶えてあげよう」

彼の魅力的な言葉が、脳内に染み込んでいく。

一つだけ……一つだけなら、なんでも叶えてくれるの？

だとしたら、どうしても欲しいものがある。

今の私が一人でどんなに頑張っても、得られないもの。

久我部長を見ると、私たちの距離はとても近づいていて、キスできそうなほどだった。

切れ長の双眸が、私を覗き込む。

——まるで心の奥まで見透かされそう。

息を吸い込んだ私は切なる願いを口にした。

「私に、あなたとの子どもをください！」

一、肉食御曹司の甘い恋の罠

給湯室に行こうとした私は、女性社員たちの華やかな声を耳にして、ぎくりと肩を強張らせる。

……まさか、あのことじゃないよね？

誰かの彼氏自慢でありますように、と祈りながら給湯室のドアを開けると、数名の女性が雑談に花を咲かせていた。私はさりげなくその脇をすり抜ける。

コーヒーをマグカップに注ごうとしたところで、同期の女性が、くるとこちらを向いた。

「吉岡さんはどう？ 今度の合コンに参加しない？」

軽い調子で告げられたそれに、思わず頬を引きつらせる。

彼女たちが話していたのは、私がつとも遠ざけたい合コンのことであつた。

たまにこうして合コンの誘いをいただくのだが、あいにく一度も参加したことがない。「そういうのにはあまり興味がなくて……」

さきこちなく笑みを浮かべて、私はやりわりと断りを入れる。

すると、輪の中の一人が小首を傾げた。

「吉岡さん、もし彼氏がいても気にしなくていいと思うわよ？ 黙ってればいいんだし」

「いえいえ、彼氏なんていませんよ」

今まで生きてきた二十六年間、一度も恋人はできなかったことがない。しかも処女である。

それならば、なおさら合コンでも行つて相手を探すべきなのかもしれないが、とあるトラウマにより、恋愛と結婚に対する願望が抜け落ちている。それどころか男性との恋

愛に不信感すらある。

ただ会社ではそのことは誰にも話していないので、周囲は私を合コンに誘ってくれたりするのだ。

そのとき、同僚の村木^{むらき}さんが華やかな巻き毛を掻き上げ、楽しそうに言う。

「よしなさいよ。吉岡さんはきつとすごいハイスペックのイケメンと付き合ってるから、合コンに来る男なんて目に入らないのよ」

村木さんの言葉のあと、あはは、と悪意まみれの笑いが起こった。

私も一緒にあって、あはは……と乾いた笑いを零す。

美人ではない凡庸な私がハイスペックなイケメンと付き合えるわけがない、とわかっているからこそ、彼女たちは笑いのにしたのだ。

だからと言って「いつかすごいイケメンをゲットしてやるんだからね！」などと奮起することはない。なにしろ恋愛への不信感でいっぱいなので。

「あ、あはは……それでは……」

引きつった笑みを顔面に貼りつけたまま、私は手早くコーヒーを注いで給湯室を脱出した。

デスクに戻り湯気の立ち上るマグカップを置いた私は、仕事を再開して目の前の作業

に集中する。

大手食品メーカーの商品企画部で働く、入社四年目の私は、シーズン毎の市場の動向や流行など様々な情報を分析して、新商品の企画やプレゼンを行い、新しい食品を市場に生み出すのが主な仕事だ。

そのほかにも、販売促進や宣伝方法などの販売戦略も並行して考えなければならない。クリエイティブで華やかな仕事と思われがちだが、市場調査や地道な企画立案など、地味な努力を積み重ねるのが実態だ。

私は大学を卒業して、この業界に就職した。忙しい業界ではあるが、自分が企画に関わった商品がコンビニで売られているのを見たときは感激もひとしおである。

今日も競合他社の動向についてネットで調べていると、フロアの向こうから低い声で呼ばれた。

「吉岡さん。ちょっと、いいかな」

「はい、なんででしょう。久我部長」

すぐに立ち上がり、部長の席へ足を向ける。

久我部長は半年前に昇進して、元いた地方の会社から、私が勤めている本社に勤務することになったエリートだ。

二十九歳という若さで部長という役職に就いたのは、我が社の御曹司であることも加

味されているだろう。

初めこそ冷徹そうな部長に反発の声もあつたけれど、仕事ができる上にリーダーシップもとれ、しかも次々と企画を会議で通しては新商品を市場に送り出す頼もしい姿に、社員たちは憧憬を込めて彼を見るようになった。

なにより、部長はイケメンなのである。

くつきりとした二重を描いた双眸は切れ上がった眺が美麗で、すつと通った高い鼻梁、そして唇はやや薄くて形良く整っている。

高身長で肩幅が広く、腰が細い。すらりとした脚はモデル並みに長かった。

そんな神が造形したかのような体躯を上質なスーツに包めば、美貌と貫禄が同居する神々しさが滲み出る。

その上、紳士的で、仕草に気品が満ち溢れていた。

しかも低くて甘い美声である。女性社員は用もないのに話しかけては「用がないなら話しかけないでくれたまえ」と、部長の低い声音を聞き喜んでいる。

独身で恋人もいないらしい……と給湯室では部長の話題でよく盛り上がっており、女性社員たちは虎視眈々と彼を射止めようと狙っているのだとか。

私はそれらの話にはいっさい関わりないので、右から左に聞き流していたけれど。

私にとって部長は、単に上司でしかない。

上司として仕事の手腕に憧れはするけれど、別に恋愛としての憧れなんか……持つてはいない。

だって恋愛不信なんだから。

そんな私の心中など知らない部長は、デスクを挟んだ向かいにいる私に数枚の書類を差し出した。

「この企画書なんだが、もう少し練ってほしい」

「承知しました。具体的にはどの点を変更しましょうか？」

そう訊ねると、部長が綺麗な長い指で、ずっと私を手招く。これは隣に来いという合図だ。

書類をこちらに向けてくれば済むのだが、どうやら同じ位置から説明したいらしい。仕方ないので私はデスクを回り込み、部長の隣に移動した。

もちろん必要以上には近づかず、一定の距離を取る。

「ここなんだが、詰めが甘い。この説明ではどの顧客に向けての商品なのかかわかりにくい」

「なるほど……言われてみれば、その通りです」

ところが、部長は書類を自身のほうに向けていた。距離をとっていることもあり、企画書の指摘箇所が見づらい。私は首を伸ばして、なんとか部長が指し示しているところ

を見ようとする。

「それから、ネーミングも。吉岡さんとしては安直だと思う」

「そうですか……」

会話をするにつれ、書類がさらに私から遠ざかってしまう。私は懸命に今の場所から動かず、首を最大限に伸ばした。

「もっと冒険していいよ。特にこれなんか、他社の商品名を真似したのかと思われる」

「あの……すみません、久我部長」

「なにかな？」

「もう少し書類をこちらに向けていただいてもよろしいでしょうか。該当箇所がよく見えないので」

「きみがこちらに近寄ればいいだろう。なぜそんなに離れているんだい？」

「なぜと言われましても……」

それならば、なぜそんなに書類を遠くに持って、しかもこちらに向けないのかと問いたい。

とはいえそんなことを部長相手に言えるはずもなくまごついてみると、椅子のキャスターを鳴らして、部長は私のすぐ傍に移動してきた。

スカートに部長の長い脚が触れそうな距離から真摯な双眸で見上げられる。

その澄みきった榛色^{はせいしよ}の瞳に、心臓がどきりと跳ねる。

「仕事なんだから、きちんと聞いてほしいんだが」

「……申し訳ありません」

今、どきっとしたのは、突然のことに驚いたからだ。そうに違いない。別に部長にときめいたりなんかしていない。

平静を取り戻そうとしたけれど、なかなか胸の高鳴りは収まってくれない。

少し部長の肩が動いて、私のカーディガンを揺らした。

それだけのことなのに、くっと息を詰めてしまふ。

それから少しだけ彼の説明は続いたが、やたらと長い時間を感じた。

「——以上だ。焦らなくていいので、もっと質を高めたものを見せてくれ」

「承知しました」

ようやく説明が終わったので、私は心の中で安堵の息を吐いた。

リテイクは残念だが、とにかくさっさと部長の傍から離れたい。

部長が書類を渡そうとするので、私は彼の手に触れないよう、細心の注意を払って書類の上部を両手で摘まむ。妙な持ち方だというのは自覚している。

だが私の作戦もむなしく、手を離れた部長の指が私の手首に軽くぶつかった。その途端、触れた熱に私の心臓がまた強く跳ねる。

「ああ、失礼」

「いえ、すみません」

私の頬が、かあつと熱くなった。

目を細めてそんな私を見た部長は、口角を上げてくすりと笑った。

「吉岡さんが妙な持ち方をするから」

思わず私は頬を引きつらせた。

——私のせいですか！

きつと私が慌てふためく姿を見て、楽しんでるのだ。なんて意地悪な男なんだろう。書類を遠ざけたのも、渡すときにぶつかったのも、部長がわざとしたのかとも思えてきた。

部署内での部長の人気は絶大だったが、こんなことが度々あって私は彼が苦手だった。リテイクとなった書類を手にして、心の中で溜息をつきつつデスクに戻る。

企画書を完成させ企画を通すまでには、忍耐力が必要である。こんな意地悪な上司と付き合うのも、仕事のうちだ。

はあ、と再び内心で溜息をついて資料の修正を始めようとしたそのとき、部長のデスクに電話が入った。

受話器を手にした彼は珍しく喜びを露わ^{あろ}にして、目を輝かせている。

「そうか！ それはすごい！」

電話を終えた部長は、何事かと様子をうかがっている社員たちに笑みを見せた。

「みんな、喜んでくれ。我が商品企画部が生み出した『うんまいっ茶』が、今期の商品の中で最高の売上を記録した」

室内に歓喜の声が響き渡る。

あのペットボトル飲料の売り上げが好調だと把握はしていたけれど、まさかヒット商品になるとは思わなかった。

次々に生み出される新商品の中で、ヒット商品になるものは一握りだ。

ヒットを出したのは、やはり部長の手腕による結果だろう。

彼の麗しい顔が、こちらに向いた。

「ネーミングは吉岡さんの発案だったな。会議では紛糾したが、あのネーミングにして当たりだったな」

「あ……そうでしたね。ヒットしてよかったです」

そういえば、『うんまいっ茶』という名前は私が提出した案だった。ほかにも候補は多数あったのだが、最終的には部長が私の案を推してくれて、正式な商品名に決まったのだ。

ただ、商品がヒットする要因はネーミングだけではなく、最終的には当然商品の味が

よいことが大切だ。だから商品開発部の尽力があつてこそだけれど、やはり自分が名前を考えた商品が埋もれることなくヒットしてくれたことは素直に嬉しい。

「今夜は祝賀会を開こう。終業後、いつもの居酒屋に集合してくれ」

部長の台詞に歓喜の声が上がる。それに伴って私の気分も上昇した。ただ気になることがある。

最近の会社の飲み会は、部長を狙う女性たちが彼の脇に陣取り、合コンの様相を呈している。あの華やかな雰囲気の中で放たれる女性たちの牽制がどうにも苦手だ。

けれどせっかくの祝賀会なので、ぜひとも参加したい。しかも私がネーミングした商品を祝うためのだから。

もしかしたら、私が部長の隣に座ることになるかも……って、別にそんな期待はしていないけども！

そう思っていたとき、村木さんが私のデスクへやってきた。彼女は申し訳なさそうに眉尻を下げている。

「ごめんなさい、吉岡さん。開発部から調整してほしいって言われてた書類が間に合わなくて……。今日中に提出なんだけど、私、得意先から頼まれてる急ぎの仕事があるから、手伝ってもらえないかしら……？」

「わかりました。代わりにやっておきますよ」

「本当!? ありがとう。書類はこれだから、よろしくね」

村木さんから渡された書類を一読する。

今日中の提出だそうだが、けっこう時間がかかるかもしれない……
 だけど引き受けてしまったからには、「できません」と突っ返すわけにはいかない。

村木さんも別の重要な仕事を抱えているようだし。

私の企画書は今日中に修正する必要があるものではないのが幸いだ。

それならば、まずは村木さんから頼まれた書類を完成させるのがいいだろう。

私はすぐに開発部に連絡を取って、微調整が必要な箇所を確認しつつ、ひたすらパソコンでデータを修正していく。

集中しながら作業を進めっていると陽が傾き、やがて終業時刻を迎えた。

部署の人たちはこれから祝賀会があるから残業はせず、次々に席を立ちデスクをあとにする。部署の人たちの背中を見ながら、私は残りの作業を進めようと気合を入れる。

するとそこへ部長がやってきて、私のパソコンを覗き込んだ。

「これは村木さんが担当しているデータじゃないか？」

「はい。彼女に頼まれたので調整しているところです。もうすぐ終わります」
 なんだか距離が近い。彼の吐息が耳にかかり、ぞくりとする。

ちらりと横に目を向けると、部長のシャープな顎のラインがすぐ傍にあった。

彼は真剣な双眸で画面に見入っている。

「ここは蛇足だからカットしたほうがいい。その代わりに次の表で補足を……」

マウスを握る私の手に、大きな手が被さった。

熱い体温を感じた瞬間、私は驚きのあまり「ひっ」と細い悲鳴を上げた。

だが部長は意に介さず、私の手に手を重ねて、勝手にマウスを操作する。

「こうしたほうがいいと思うんだが。どうだろう、吉岡さん？」

「あ、はい。そうですね。部長のおっしゃる通りです……」

終わったのなら手を離してほしいのに、部長はまだ私の手ごとマウスを握っている。
 どんどん顔が熱くなっていく。

そのとき、村木さんが巻き毛を掻き上げながら私のデスクにやってきた。彼女は、にこやかな笑みを浮かべて部長に声をかける。

「部長、そろそろ行きましようよ。部長の名前で席を予約してるんです」

「しかし村木さん。吉岡さんが今作っているこの書類は、本来はきみの仕事ではないのか？」

部長は不機嫌そうに眉をひそめる。

気まずい空気にならないよう、私は慌てて取りなした。

「私が請け負ったわけですから、これは私の仕事です。もうすぐ終わりますので、お二

人は先に行っててください」

「ですって。行きましよう、久我部長」

村木さんは部長の腕を取ると、しなだれかかるように自分の腕を巻きつけた。それと同時に彼の手は私の手から強制的に剥がされる。私は、ほっとしたような寂しいような複雑な気持ちになった。

だが部長はさりげなく村木さんの腕をほどき、鞆を脇に抱えた。まるで村木さんが腕を回せないようにガードしているみたいだ。

「それなら先に行っているが……吉岡さんちゃんと来るように。きみが主役なのだから」

「わかりました。必ず行きますから、どうぞお先に」

私は微笑を浮かべて答えると、すぐに作業へと戻る。

部長がもう一度こちらを振り返ったのが視界の端に映ったが、村木さんに促されてフロアを出ていった。

部長の言う通り祝賀会に参加するべく、私は必死にデータを修正した。よく見直してみると、先ほど部長が言っていたことが、非常に納得のいく指摘であるとわかる。

少しだけ詰まっていた資料修正だったが、部長の指摘部分を直したことでスムーズに進み、無事に書類を開発部に提出することができた。

開発部からの受領のメールを確認した私は、椅子の背もたれに背を預け脱力した。

「ふう……終わった。もうみんなは、けっこう呑んでる頃かな」

パソコンをシャットダウンしてデスクを整頓し、鞆を持って退室する。

外に出ると、オフィス街は会社帰りのサラリーマンで溢れていた。

部署でよく利用している居酒屋は、徒歩十分ほどの場所にある。

早足で向かった私は、店の縄暖簾を掻き分ける。店内へ入ると、喧噪と炭の香りが漂ってきた。

「吉岡さん、こっちですよ」

カウンター席の向こうにある座敷席から、同期の高橋くんが呼びかけてきた。

高橋くんはお酒はあまり得意ではないようで、テーブルに置いてあるビールはほとんど減っていない。

彼の体格は華奢で中性的な雰囲気があり、ミステリアスなタイプだ。彼女いない歴は年齢と同じと公言しているので、私と似たもの同士だと密かに思っている。

細長い座敷には、部署の二十名ほどが座っている。それぞれがジョッキを傾けながら談笑していた。

「遅れて申し訳ありません」

「どうぞ。ぼくの隣に座ってください。というか、ここしか空いてないです」

彼の返答に苦笑しつつパンプスを脱いで座敷に上がり、末席の高橋くんの隣に腰を落ち着けた。

遙か向こうの上座から、部長がこちらに軽く手を挙げたので、私は会釈して返す。部長の周囲を一瞥すると、もちろん村木さんをはじめとした女性たちが陣取っていて、料理を取り分けたり、笑顔で楽しげに部長に話しかけたりと、とても賑やかだ。

店員に生ビールを注文した私は、ちょっとだけ残念な気持ちになりながら、おしぼりで手を拭く。すると、ネクタイを緩めた高橋くんがさりげなく話しかけてきた。

「Mさんから頼まれてた書類は、終わったんですか？」

「え？ ええ、無事に提出しました」

Mさんとは村木さんを指しているのだと思うが、なぜ匿名にするのだろうか。

「あれ、わざとですよ」

「えっ？」

どういうことだろうと、目を瞬かせる。

私が頼んだビールがやってきたのを見て、高橋くんは自分のジョッキを軽く掲げた。私もそれに倣ってジョッキを掲げて、一口呑む。

ジョッキを触れ合わせたりしないところが、高橋くんの人との距離の取り方を表している。彼も人間不信なところがあるのだ。普段、彼と話していると、それが滲み出してい

るのを感じる。

私はお通しに箸をつけながら、高橋くんに訊ねた。

「わざとって、なにがですか？」

「祝賀会が決まってから、Mさんは吉岡さんに仕事を頼んだじゃないですか。でも彼女はほかに急ぎの仕事なんてやってませんでしたよ。K部長の隣を確保するために、わざと吉岡さんを遅れさせるように仕向けたんです」

もはやイニシャルにする意味はあるのか。

高橋くんの真剣な考察を聞きながら、乾いた笑いを漏らしてしまう。

確かに遅刻していなければ、ネーミングの発案者である私が主役として扱われて、部長の隣に座っていたかもしれない。

そつと上座を見やると、どこか不機嫌そうな部長とは対照的に、彼を取り囲んだ女性たちは嬉々としていた。

だけど、どこか牽制しあう女性たちから、見えない火花が散っている気がする。

「私は別に気にしてませんけどね。K部長の隣に座りたいわけでも……ありませんから」

「わかってないなあ。吉岡さんはK部長のお気に入りだから、Mさんにああいう意地の悪い手口を使われるんですよ」

「お気に入り!? 私がですか？」

大皿に盛られた鶏の唐揚げを小皿に取っているとそんなことを言われ、目を見開く。部長とは仕事の話ししかしたことはないし、彼が特別私に目をかけているといったことはないはずだ。

ところが高橋くんは大仰な溜息をついて、首を横に振る。

「見てればわかりますよ。通常、部長は極力誰にも触れないよう一定の距離を取ってるのに、吉岡さんにだけやたらと近づくじゃないですか。それに吉岡さんの手に重ねてマウスを動かす……って、好意がなきゃやらないですよ。ほくなら他人の手なんて穢けがらしくて、できません」

私は呆然とした。

部長は距離感が近すぎると思っていたけれど、それは私限定のことだったのだろうか。「というか、高橋くんの考察に脱帽ですよ。よく見えますね」

「ぼくは繊細なので、いろんなことが気になるんですよね。吉岡さんが鈍感すぎて損をするのを見過ごせなかったたので報告しました。今後の参考になれば幸いです」

「はあ……ありがとうございます」

今後の参考になるのかは謎だ。

なぜなら私は恋愛や結婚に興味がない。

学生の頃は乙女らしく『恋愛・結婚・妊娠・出産』という四つの柱である女の幸せに

憧れていた。

だが、とあるトラウマにより、恋愛と結婚への憧れがすっかりなくなってしまったのだ。

残る望みは、妊娠と出産。

私は子どもが好きなので、どうしても自分の子どもが欲しい。

自分の赤ちゃんを抱っこしたいし、よちよち歩きの我が子に「ママ」と呼ばれたい。だけどそのためには相手が必要だ。一人では妊娠できないのである。そして恋愛不信であるというところに立ち戻り、願いは絶望的だと理解する。

ジョッキを少しだけ傾けた高橋くんは、遠くに向けていた視線をこちらに戻した。

「K部長は嫌がつてそうですね。女性だけで盛り上がっている感じです。ところで吉岡さんはK部長に興味ないんですか？」

私は、ぎくりと肩を震わせた。

「K部長というより、私は男性との関係とか、そもそも恋愛自体に不信感を抱いてますね」「どうしてですか？」

「私の過去のトラウマです。そのせいで恋愛を信じられなくなってしまったんですよね」「過去のトラウマって、なにがあったんですか……と聞きたいところですけど、長くなることは必至だと思うので、タイトルだけ聞かせてください」

高橋くんは詳細を聞いてもいないのに、恐れたように身を引いている。

おそろくどこにでもこんな話は転がっていて、高橋くんも誰かに似たような話を延々と聞かせられて辟易した経験があるのだろう。
私としても彼に詳細を話す気はない。私の憤りまで話したら最後は愚痴になってしま
うから。

「そうですね……タイトルをつけるとしたら『あてのないドライブ』ですね」
意味不明だったのか、高橋くんは眉根を寄せた。

「ホラーみたいなタイトルですね。ドライブがトラウマなんですか？」

「そういうことです。高橋くんは好きな人とか、いないんですか？」
話題を逸らすためと、礼儀としても相手にも訊ねてみたのだが、高橋くんからはさ
すの答えが返ってきた。

「ほくですか？ ほくは学生のときに好きだった女性が親友と付き合うことになって、
それをずっと引きずったままですね」

「きつと彼女は今頃、高橋くんのよさに気づいて、付き合わなかったことを後悔してま
すよ」

「あゝ、そういう根拠のない慰めはやめてください。傷が抉られますので」

「……それは失礼しました」

場はそろそろお開きという頃になり、みんなは帰り支度を始めている。

私も残ったビールを飲み干して、取り皿に取った料理を平らげた。

会計が終わったので、みんなは続々と席を立つ。

村木さんが部長に「このあと、どうします？」と訊ねている声が聞こえた。

二次会へ行く人もいるだろうが、このあとは個々の流れになるので、私はさっさと帰
宅するつもりだ。

お手洗いを済ませてから居酒屋の外へ出ると、高橋くんは早々に駅へ向かっていた。
店の前には二次会を相談する一団がいたが、それを避けて私も駅へ行こうとしたとき。

「吉岡さん、ちょっといいかな」

甘くて低い声がかけられ、ふと振り返る。

話題になったK部長——もと久我部長である。彼の両隣には村木さんともう一人の
女性が、びったりとくっついていていた。

このあと彼らはどこかで呑むと思われるが、私は参加する気はない。

まさか誘われるわけではないと思いますが、平静を装って返事をした。

「なんででしょうか？」

「このあと、二人で呑もう。話したいことがある」

途端に女性たちから不満の声が上がった。

部長が二人きりで呑む相手に私を指名したことが、彼女たちはショックのようだ。

誰もが不満の声を上げるだけだったが、その中で果敢にも村木さんが部長に提案した。「久我部長。私たちも一緒に一緒にいいかしら？　せっかくだからみんなで行きましようよ」

「村木さん。俺は、吉岡さんに話があるんだ。きみたちはほかのグループで呑みたまえ」芯の通った、有無を言わせぬ声音が響く。圧倒された村木さんは黙ってしまった。おそろくだが、部長の話とは説教ではないだろうか。

仕事のことか、それとも先ほど高橋くんとイニシャルで噂話をしていたのがバレしてしまったとか。

いずれにせよ、上司と二人きりで呑むなんて、村木さんたちが想像するほど楽しい話ではない。

「……わかりました。一緒にさせていただきます」

仕方なく私は承諾した。確かにイニシャルでの噂話は、本人の耳に入ったら不愉快極まりないだろう。そのことを指摘されたら、高橋くんの分も素直に謝ろう。

「では、行こうか」

部長は女性たちの輪から抜け出すと、滑らかな仕草でてのひらを差し出し、私を促した。背後からは女性たちの残念そうな声が聞こえた。

どうせお小言なのだろうからそんなに残念がらなくても……と思いつつ、私は部長の

あとについていく。

私の少し前を歩く部長の背中が広くて見惚れてしまう。脚も長いし、どこから見てもスタイルのよい完璧な人だ。

小言なのだから近くの居酒屋にでも入るのだろうと思っていたが、どうやら少し遠い店のようで、部長の歩みは止まらない。

歩道を進んでいると、車道ぎりぎりを車が通過して、ひやりとさせられる。

少し酔っているから、気をつけないと。

そう思ったとき、前を行く部長が、つと振り返った。

「危ないから、こちらに」

長い腕を伸ばして腰を引き寄せられ、歩道側へと誘導される。部長と体が密着して、どきんと心臓が跳ね上がる。

これは車に接触しそうになったからなのか、それとも部長とくっついたからなのか……よくわからない。

「あの、大丈夫ですか」

さりげなく離れようとしたが、部長の手は私の腰にしっかりと回されている。

「いけない。転んだらどうするんだ」

「これだと、私が転んだら部長まで巻き添えになってしまいますけど」

「きみを転ばせないくらいには鍛えているから安心したまえ」
ふっと部長は笑みを向ける。

頼もしいな……なんて、きゅんと私の胸が鳴ってしまった。

……私、部長に好意を持っているのかな？

そんなわけないよね。だってもう私は恋愛しないんだから。

そうしてしばらく二人で歩いていくと、繁華街を抜けて大通りに差しかった。

少し歩いたあと部長が入ろうとしたのは、大通りに面した外資系の高級ホテル。

「え。ここですか？」

「夜景を見たくなくてね。ホテルの最上階にあるバーで飲み直そう」

まさかラグジュアリーホテルに行くとは。

部長は微笑を浮かべ、私の腰を支えながらエスコートしてくれた。

ドアマンが丁寧にお辞儀する脇を通り抜けて、クリアガラスの洒落た回転ドアを通った。

ホテルのロビーは煌めくシャンデリアが吊り下げられ、磨かれた大理石のフロアが輝いている。水が流れるオブジェがあつて、とても豪華な空間だ。

こんなに高級なホテルに入ること自体が初めてで、思わず目眩がしてしまう。けれど部長がホテルの夜景が見たいと言うのなら、ついていくしかない。

「チェックがあるから、ちよつとここで待っていてくれ」

「はい」

ロビーの一角にある膳脂色の椅子を勧められたので、大人しくそこに腰をかける。

格式あるホテルでは、バーの利用であつてもデスクでのチェックインが必要なものかもしれない。

コンシエルジュデスクからすぐに戻ってきた部長は、笑みを浮かべて私に手を差し出した。

「さて。お嬢様が酔っ払っていないか、チェックしてみよう」

「お嬢様だなんて……。部長のほうが酔ってるんじゃないんですか？」

部長の冗談に、私は顔を綻はせる。

「俺は酔い潰れたことはないよ。だから安心して俺の手を取るんだ」

「では、お言葉に甘えて……」

姫を守る騎士のように差し出された大きなひらに、私はそっと自らの手を重ねた。

部長の手は、火傷しそうなくらいに熱い。彼の熱い体温がてのひらを通して、体中に浸透するような錯覚に襲われ、どきどきと胸が高鳴る。

部長の手を借りて私は難なく立ち上がった。

……酔いが回っているわけではないので平気なのだけれど、なぜかこの手を離したく

ない。

「うん、大丈夫みたいだね。でも心配だから、バーの椅子に腰を下ろすまで手をつないでいよう」

「ええ……？ 恥ずかしいです」

「それじゃあ、俺の腕に手を回して」

「それも恥ずかしいです」

「それじゃあ……」

私たちは戯れのように話しながら、ロビーの奥にあるエレベーターへ向かった。結局、手はつないだままだ。

豪華なエレベーターホールには私たちしかない。部長がエレベーターのボタンを押すと、すぐにドアが開いた。

どきどきと胸の鼓動が大きく鳴り続けているのは、稀有な体験をしているから。別に部長に惹かれているわけではない……たぶん。

浮遊感がなくなり、最上階のフロアにエレベーターが到着する。エレベーターから降りたあとも私たちはしっかりと手をつないで、潇洒なバーへ入った。

ピアノの生演奏が流れているバーは、しつとりした雰囲気が漂っている。青い墨を垂らしたかのような薄闇の中、ところどころに点されたほのかな橙色の照明を見ると、心

が落ち着いてくる。

音もなく近づいてきたスタッフに、部長はなにかを告げた。

彼は薄闇の中で私の手を引き寄せると、そっと耳元で囁く。そうしないと、ピアノの調べで聞こえにくいから。

「さあ、窓際の席へ行こう。夜景がよく見えるよ」

「は、はい」

部長に導かれて、窓際へ近づく。

「わあ……綺麗……」

窓の向こうに視線を向けると、きらきらした夜景が輝いていた。

まるで黄金と貴石がちりばめられた海のような。感嘆の息を吐いた私は、目を細めて都会の夜景に夢中になった。

「気に入ってくれたかい？」

部長の声にハッとなって視線を外し、窓際のボックス席に座る。ピアノの奏でる曲と、人々の囁き声が混じり合う極上の空間に身を浸す。

「……こんな素敵な夜景、初めて見ました」

「デートでは来たことないの？」

何気なく質問をされて、ぎくりとする。

これまでこんなにも華やかな世界は知らなかった。でも二十六歳という年齢を考えたら、バーで夜景を見るデートくらい、当たり前なのかもしれない。

「えっと……」

言い淀んでいると、スタッフが飲み物を運んできたので、私は口を閉ざした。

私が夜景に夢中になっていてる間に注文してくれたようだ。部長はスタッフから受け取った黄金色のカクテルを、私の前に差し出す。

「これは……オレンジジュースですか？」

「アプリコットフィズ。アマレットを炭酸で割ってレモンジュースを加えているから、爽やかな呑み口だよ」

そう説明した部長は、自らはウイスキーのロックを手にしている。

レモンと氷が浮かんだカクテルは照明の明かりを反射して、きらきら光っている。初めて呑むカクテルだけれど、レモネードが好きなので、このカクテルも私の好きな味だろう。

私はロンググラスを両手で取り、黄金色のカクテルを夜景にかざした。

部長も軽くロックグラスを掲げる。

「乾杯」

「おつかれさまです」

カクテルを一口呑む。アプリコットの甘さの中に、レモンの酸味が絶妙に混じり合っていて、とても美味しい。

「甘くて飲みやすい……美味しいです」

「花言葉と同じようにカクテル言葉というものがあって、アプリコットフィズには『振り向いてください』という意味が込められているんだ」

甘く優しく私に囁く部長は、ロックグラスを片手に微笑んでみせた。

仕事に厳しい普段の部長からは考えられないセクシーさが溢れている。

『振り向いてください』

——まさか、私に？

どきんと胸が鳴るのと裏腹に、私の心の底には疑念が湧いた。

なんだか場慣れしている部長は、ほかの女性ともこうして夜景を見に訪れたのではないだろうか。

私は素知らぬふりをして、先ほどされたのと同じような質問を返した。

「部長はよくデートで、ここを利用されているんですか？」

モテる部長のことだから、このバーも常連なのではないか。うちの部署の女性なら、部長に声をかけられて断る人なんていないだろうし。

「いいや。俺、今までデートしたことないんだよ」

「……えっ!？」

ところが部長は、あっさり言い放った。

「このバーは一人でよく来るけどね。いつもはカウンターで呑んでる」

なんと、部長はデート未経験者らしい。私も似たようなものだけれど。

私はともかく、イケメンで御曹司の部長がデートをしたことがないなんて信じられない。それとも、家柄の格が高いゆえに、軽々しくデートできないといった事情なのだろうか。

「そうなんですね。部長はモテるから、意外です」

「好きでもない人にモテてもしょうがないよ。デートだって、好きな人としかたくないだろう?」

「確かに……そうですね」

「さっきの質問だけど、吉岡さんはデートしたことないの?」

「実は、私もないんです。デートなのかどうか、わからなかったことはありますけど」部長があっさりデートをしたことがないと打ち明けてくれたので、私も言いやすかった。

ただ、『あてのないドライブ』はノーカウントかと思うが、正直な部長の前では誤魔化すこともできず、つい補足してしまった。

「なるほど。曖昧なのはあるんだね。その男に嫉妬してしまうな」

「あれは……忘れたい思い出なんですけどね」

すると彼は気遣わしげに言った。

「居酒屋で小耳に挟んだけど、『あてのないドライブ』に関係があるのかい?」

そのワードを耳にして、あれだけうるさかった私の鼓動がすうっと静かになる。

『あてのないドライブ』は、私が恋愛と結婚に絶望し、トラウマとなるまでに至った元凶の出来事だ。

他人からしたらたいした話ではないだろうし、この流れで秘密にするほうが不自然だろう。

「……その通りです。私のトラウマなんです。『あてのないドライブ』のこと、話してもいいですか?」

「もちろん。ぜひ聞きたいね」

夜景に目をやった私は、訥々と話し始めた。

「学生時代に、合コンで知り合った鈴木さんという男性と連絡先を交換しまして。彼は社会人だったので、普段は彼の仕事が終わってから、夜中に彼の車であてもなく街中をドライブするデートのようなことを、頻繁にしていたんですよ」

「ふうん。食事に行ったりしないのかい?」

「しないんです。どこにも寄らずにドライブするだけでした。彼の会話も上辺だけのような感じで、そもそも私たちが付き合ってるかどうか疑問だったんです」

「……なるほど」

「なにかイベントが必要かなと思った私は、年末が近かったので彼に年賀状を送ろうとしました。それで彼に住所を聞いて年賀状を送ったんですが……それ以来、音信不通になりました。年賀状はお正月明けに『あて所不明』のスタンプが押されて戻ってきて、彼とはそれきりです」

年が明けて数日、年賀状が戻ってきたときに受けた衝撃は忘れられない。

年賀状を送る前に鈴木さんに確認をとったので、私が住所を書き間違えたということはない。

ということとは、彼は平然と嘘の住所を私に教えたのだ。

つまり、家を知られたくないし、私とは恋人のような関係を望んでいないという表れだった。

お互いの気持ちが盛り上がらないのも当然だ。彼は自分のことを明かしたくないと、隠していたのだから。もしかしたら、鈴木という苗字も偽名だったのかもしれない。

部長は眉根を寄せた。

「それは……嘘の住所だったということだよね。その彼は結婚してたんじゃないか？」

「ええ。姉や友達にこの話をしたら、みんなそう言いました」

このことを、私は姉や友達に相談した。

そうすると、「その人、結婚してたんだよ」という、まったく同じ答えが返ってきた。「そうだろうね。既婚者だから家を知られたくないし、店に入らないのは、吉岡さんといるところを知り合いに見られたくないからだろう。しかし車で連れ回した挙げ句、嘘の住所を教えるとは、不誠実な男だな」

「ですよ……。あてのないドライブはなんだろうと思いましたが、私から誘うのを待ったというのが周りの意見なので、そうなんだと思います」

私は赤いスタンプの押された年賀状を、ゴミ箱に捨てた。

鈴木さんとはなにもなくてよかった。あんな卑怯な男に処女を捧げなくて助かったと思おう。捨てた年賀状を見て、私はそう決心した。

この経験のせいで、恋愛や結婚に夢を見られなくなったというわけだ。

「吉岡さんは、その男に未練があるの？」

私は勢いよく首を横に振る。

未練なんてあるはずがない。恋心もなにも、始まる前に裏切られたのだから。

「ありません。気持ちが盛り上がらないまま終わりましたから。それから合コンには行ってませんし、出会いを求めなくなりましたね」

「なるほど。それで恋愛や結婚に絶望したというわけか」

「はい……」

「じゃあ、その『あてのないドライブ』はデートとしては数えないことにしようか」

「そうしてください」

部長は優しい笑みを浮かべて、私の髪をそつと撫でた。

「そんな男のことなんか忘れる。きみを大切にしてくれる男は、きつといるよ。案外、すぐ近くに」

「えっ……それって……」

私は瞠目した。

意識すると、どきどきと胸が高鳴る。顔が熱くなったのは、お酒のせいだと思いたい。

部長はどういうつもりなんだろう。

彼は先ほどから、手をつないだり、『振り向いてください』というカクテル言葉を持ち出したり、まるで私を口説くどいているような素振りを見せる。

経験のない私をからかって楽しんでいるのだろうか。

怒るべきなのかもしれないけれど、部長の言葉の一つひとつが私の胸に染み込んで、心臓を揺らすので、反応に困ってしまう。

私はカクテルを呑んで気持ち落ち着かせた。

でもその間も、部長は端麗な顔をこちらに向けて、じつと見つめてくる。

「俺なんか、どうかな？」

「あの……からかうのはやめてください」

「からかってないよ。俺はいつでも真剣だ」

「だって、部長が私を口説くどいてるみたいに感じられるんです」

「好きな人としかデートしたくないと言ったろう。つまり口説くどいているんだが、ほかにどう聞こえる？」

「……経験のない私をからかっているように聞こえます」

部長の手にしたロックグラスの水が溶けて、カランと涼しげな音を立てた。

「俺が、からかうような男に見える？ 吉岡さんの中では、俺はどんなイメージなのかな？」

「仕事には厳しい上司というイメージですね。ここに呼ばれたのも、なにか仕事のことでお説教でもされるのかなと思いました」

苦笑した部長は、ことりとロックグラスをテーブルに置いた。

「そう思われても仕方ない誘い方だったね。きつく言わないと、吉岡さんは誘いに乗ってくれなさうだからな」

「……部長が、私を本気で口説いている？」

にわかには信じられなかった。

だってイケメンで御曹司の彼が、こんな凡庸な私を特別に扱って、果ては口説こうだなんて、夢でも見ているようだ。

恋愛なんてしない。私にできるわけがない。

でも、もし子どもを授かるとしたら、その相手は部長がいい。彼でなくては嫌だという確固たる思いが私の中にはいつの間にか存在していた。

——実は、私は部長に恋しているのかもしれない。

けれど、かぶりを振って湧き上がった想いを否定する。

あれだけのトラウマがあるのだから、私はもう恋なんてしない。ただイケメンで仕事のできる部長の優秀な遺伝子が欲しいだけなんだから！

とはいえ、まさかあなたの遺伝子だけくださいと言うわけにもいかない。

私は優しい目でこちらを見ている部長を、ちらりと見た。

「初デートの相手が、久我部長でよかったです」

勇気を出してそう告げると、彼は破顔する。

「俺もだよ。吉岡さんと、初めてのデートをしたかったから」

「どうして私なんですか？ 私は美人でもないし、平凡な女です」

ほろ酔いになった私に、部長が囁く。

「吉岡さんはとても仕事を頑張っているよね。そういう一生懸命な姿に惹かれたんだ」

「……仕事ですから、懸命にこなすのは当然です」

少し酔った私は、ふわふわしながら返事をする。

部長は妖艶な雰囲気をもとい、私を見つめた。

「ご褒美に、一つだけ願い事を叶えてあげよう」

彼の魅力的な言葉が、脳内に染み込んでいく。

一つだけ……

なんでも叶えてくれるの？

だとしたら、どうしても欲しいものがある。

今の私がどんなに頑張っても、一人では得られないもの。

部長を見ると、二人の距離はとても近くて、キスしそうなほどだった。

切れ長の双眸が、私を覗き込む。まるで心の奥まで見透かされそう。

息を吸い込んだ私は切なる願いを口にした。

「私に、あなたとの子どもをください！」

正直に言って、俺は面食らった。

吉岡さやかの願いは斜め上のものであったからだ。

——あなたとの子どもをください。

いろいろと過程を飛ばしているようだが、彼女はいつたいうつもりなのだ。

「……吉岡さん。俺の聞き間違いでなければ『あなたとの子どもをください』と、きみは言ったのかな？」

吉岡さんは今さら自分の発した台詞に羞恥を覚えたようで、かあっと顔を赤らめた。そんな顔も最高に可愛らしい。

うろろろと視線をさまよわせてから、彼女はようやく頷いた。

「……はい。言いました」

なんだか俺がいじめているみたいで、嗜虐心しぎょくしんが煽られる。

彼女を、ぎゅっと抱きしめたい衝動を、俺はかろうじて抑えつけた。

さて。どう出るべきか。

彼女をホテルのバーに誘ったのは、もちろん下心があるからだ。

御曹司という身分だからか、俺は学生るときから女にちやほやされてきた。

だが、彼女たちが好きなのは俺の顔や身分であって、俺自身に興味のあるやつはいない。それどころか俺に対して御曹司らしい言動を求めてきて、辟易へきえきとしていた。

今の会社でも同じだ。女性社員たちは、御曹司と交際して結婚する幸せな自分……という夢を追いかけているだけで、俺自身のことは見ようとしてない。

そんな中で、吉岡さやかだけは異質だった。

どうにも彼女にだけは避けられている気がする。俺を避ける女など、今までに見たことがない。

苦手意識を持たれると、肉食の血が騒いでしまう。

——吉岡さやかに近づきたい。

彼女は、俺のかぎ爪でちよいちよいと引っかけてやると、おもしろいほど反応を示す。初めは真っ赤になって反論していたが、やがて俺のやり方に慣れると、距離を取るようになった。そこをまたかぎ爪で引っかける。吉岡さんとのやり取りは楽しくて仕方ない。

だが、彼女を弄もてあそびたいわけではない。

懸命に仕事を頑張る姿を見ているうちに、健気な吉岡さんの力になりたいと思うようになった。

例えば今日、彼女の同僚である村木から意地悪く仕事を押しつけられたときも、嫌な

顔一つせず彼女は引き受けた。そんな真面目なところにも好感を持つている。やがて俺は、仕事だけでなくプライベートの彼女のことでも知りたくなった。

だが、会社の飲み会では肉食女子たちに囲まれて身動きがとれない。しかも吉岡さんは、高橋と仲睦まじそうに話しているではないか。

俺の耳に、二人が恋愛について話しているのが届いた。

二人の話していた『あてのないドライブ』のことを聞き出す目的もあり、ホテルのバーへ誘ったわけだが、話を聞いて納得した。吉岡さんは恋愛に奥手のようだが、それは昔の男から与えられた傷のせいだったのだ。

そうなると、デリケートになっている彼女に「付き合ってくれ」と告白さえすればいいというわけにはいかないようだ。

俺は彼女の顔を覗き込んで、微笑を浮かべた。

「それは、一夜に誘ってこれている、と受け取ってもいいのかな？」

「いえ、あの、私、すごく大胆なことを言っちゃいましたよね」

「少し驚いたけどね。俺はきみの気持ちを大切にしたい。吉岡さんは、子どもが欲しいの？」

「はい。恋愛や結婚はしなくていいんです。子どもだけが欲しいんです」

彼女は言いきった。

独特な価値観に、俺は笑みを顔面に貼りつけながら内心で驚愕するしかない。

「つまり……俺の体だけが目当てで、それ以外に興味はない……ということかい？」

「ええと……はい。そうなります」

——この機会を逃してはならない。

彼女が俺と寝たいと望んでいるなんて、極上の据え膳だ。

しかし俺としては体だけの関係でいいわけではないので、少々舵取りをしたいところだ。

彼女にバレないよう牙を綺麗に隠した俺は笑みを見せる。

「それじゃあ、部屋へ行こうか。二人きりの空間で、もう少しゆっくり話そう」

バーへ来る前に、すでにコンシェルジュデスクで部屋を取っている。吉岡さんから、泊まるのかと疑問がなかったのには驚いたが、清純な彼女のことだ、バーへの入場にもチェックが必要と思ったのかもしれない。

そのときちょうど、ピアノの演奏がやんだ。

バーは静かな空間に包まれる。

周りに目を配った吉岡さんは、ゆるゆると頷いた。

我々はそれぞれのグラスを手に取ると、残った酒を飲み干した。

ロックグラスに隠して舌舐めずりをした俺は、無垢な羊を捌め捕る算段をした。

バーを出た私と部長は、エレベーターに乗り込み、ある階で降りた。

いくつもの扉の前を通り過ぎて廊下を進み、突き当たりのドアの前で部長はカードキーをかざす。

最初にデスクに寄ったときにチェックインを済ませていたようだ。

ということは……部長は私の話を聞く以前から、ホテルに泊まる前提だったのだろうか。

私は脳内に広がる妄想を打ち消した。

二人でホテルに泊まると、あらかじめ決まっていたわけではない。部長が一人で宿泊するつもりだったのだろう。

廊下を進み室内に入ると、丁寧に整えられたベッドが二つ並んでいた。奥には簡易的なデスクと椅子がある。窓からは鮮やかな照明に彩られたシンボルタワーが見えた。

「綺麗ですね……」

私が呟くと、あとから部屋に入った部長が、カチリとドアガードをロックする。防犯のために必要だからだろうけれど、なんだか部長に囚われたように感じてしまう。

景色を眺めていると、後ろから、そっと部長に抱きしめられた。

熱い彼の体温に、どきどきと鼓動が高まる。

「あの……部長……」

「その、『部長』はやめよう。仕事みたいだから」

「わかりました。じゃあ、久我さん」

「いいね。俺は、さやかって呼ぶから」

部長——久我さんは、ゆっくりと、でも確実に私との距離を詰めてくる。なんだか猛獣に捌め捕^{つか}まれるかのよう。

でもそれは嫌ではない。彼の傍に居るのは、心地よかった。

改めて考えると、『子どもだけ欲しい』なんて身勝手な言い分だったと思う。

けれど、相手が久我さんだから言えたのだ。責任を取らなくていいなら楽だ、なんて考えるような男だったら、たとえ酔っていたとしても、きつと言わないと思う。彼に抱きしめられて、嫌悪感はまったくなかった。

嫌悪を感じないということは、私は久我さんに好感を抱いているんだ……と思えた。

「先ほどの話なんですけど……私は恋愛も結婚もするつもりはないんです。昔は憧れていたときもありましたけど、それらに絶望したから子どもだけ欲しいという考えに至ったんです」

「憧れていたときは、あったんだね」

「それなりには……。乙女でしたから」

振り向くと、すぐ傍に久我さんの優しい顔があった。

端麗な顔がこんなにも近くにあるなんて、ほんとと胸が弾んでしまう。

「さやかの憧れを、取り戻してあげたいな」

「どうやってですか？」

「そうだな……。まずは俺に気を許してもらわないといけない」

久我さんは、そっと私のこめかみにくちづけた。

雄々しくて熱い唇が押し当てられ、どきりとする。

「あ……っ」

「嫌だった？」

私はゆるゆると首を横に振った。ちっとも嫌ではない。

「う、嬉しい……です」

久我さんにキスされて嬉しい。

私の心が喜びに溢れている。

久我さんに正直に言うのと、彼は妖艶な笑みを見せた。

「それじゃあ、これはどうかな？」

立ち読みサンプル はここまで

向き合った彼に、頤を掬い上げられる。

ちゅ、と今度は唇にキスされてしまった。初めてのキスに、私は目を見開いて硬直し

てしまう。

けれど胸の鼓動は、とくとんと甘く響いた。

……キスって、こんなに柔らかいんだ。

ちゅ、ちゅ、と小鳥が啄むようなバードキスを繰り返す。彼とのキスが気持ちよくて、

頭がぼうつとしてくる。

少し唇を離れた久我さんが、私に問いかけた。

「俺とのキスは、気持ちいい？」

「はい……」

「さやかは、俺との子どもが欲しいという気持ちに変わりはない？」

私は、しっかりと頷いた。

子どもは欲しいけれど、相手は誰でもいいわけではない。

久我さんとの子どもが欲しい。

つまり私は、彼に抱かれることを望んでいる。

処女を捧げるなら、久我さんがよかった。

「久我さんとの子どもが欲しいんです。あの、よかったら……私の処女を、もらってく